

## 立命館大学 学外研究成果報告書

2011年11月23日

立命館大学長 殿

所属： \_\_\_\_\_ 文学部/研究科 職名： 教授 氏名： 小田内 隆 印

このたび学外研究を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。

		所属長承認		印	
研究課題	中世ヨーロッパにおける正統-異端関係の形成				
申請区分	<input checked="" type="checkbox"/> 学部研究科人数・予算枠内 <input type="checkbox"/> 学外資金・セメスターごと人数枠内 <input type="checkbox"/> 役職者別枠 <input type="checkbox"/> 助教				
滞在先国名 (複数ある場合は 全て記入してく ださい)	日本		<input type="checkbox"/> 国外のみ <input checked="" type="checkbox"/> 国内のみ <input type="checkbox"/> 国内__ヵ月、国外__ヵ月		
研究期間	2011年4月1日 ～ 2011年9月25日 (6ヵ月間)				
研究日程 概要	期 間		滞在都市名		研究機関名
	①	2011年 4月 ～ 2011年 9月	京都		自宅
	②	年 月 ～ 年 月			
	③	年 月 ～ 年 月			
	④	年 月 ～ 年 月			
	⑤	年 月 ～ 年 月			
	⑥	年 月 ～ 年 月			
<b>1. 実施状況：</b> 研究方法や受入研究機関との関係なども含め、上記研究日程概要に即して実施した事柄を具体的に記述してください。					
<p>今回の学外研究では中世ヨーロッパにおける正統-異端関係の形成過程を封建社会の発展との関連において総合的に検討することを目指している。そのために、異端審問成立以前、12～13世紀における正統-異端問題をカタリ派異端のケースについて史学史的・史料論的に再検討することであった。</p> <p>研究計画のひとつにあげたこれまでの研究成果の改訂作業については、ここ10年間で新しい史料や研究の登場による個別の点での見直しの必要、昨年度に公刊した中世異端論で提示した解釈の枠組みに適合させる必要など、諸般の事情で部分的にしか実現できなかった。</p> <p>これに対して、「カタリ派異端」の起源に関する従来の研究の再検討については、この異端の東方起源論の根拠となっている12世紀後半におけるラインラントの一群の年代記・論争書や13世期の異端審問官が書いたカタリ派の異端系譜論などを同時代の教会政治や改革論争というコンテキストで読み直す作業を実質的に進めることができた。</p>					

**2. 成果の概要：** 今回の研究成果の概要を上記の実施状況に則して具体的に記入してください。 [2500～3000字程度]

以下において、「カタリ派異端」の成立史に関する見直し作業から得られた新しい研究方向の見直しについて報告する。19世紀以来、「カタリ派異端」の起源については一つの明確なヴィジョンが存在した。すなわち、古代末期のマニ教(2～5世紀)から7世紀のパウロ派(小アジア)、10世紀のゴミール派(ブルガリア→ビザンツ帝国)へ、さらに西欧のカタリ派(南フランス・イタリア)へと、地中海世界の東西に渡って一千年をかけての時空で織りなされる壮大な系譜の最後の連鎖をなす、と。さらに、カタリ派が統一的な二元論教義と儀典を有し、ローマ・カトリック教会を模倣した超地域的な「対抗教会」を組織したという見解である。この解釈は19世紀半ばにカタリ派に関する本格的な歴史研究に先鞭をつけたシャルル・シュミット以来、大部分の研究者によって半ば自明視されてきた。しかしながら、同時代の年代記・異端審問記録などを総合的・批判的に読み直せば、こうしたカタリ派の成立にかかわるイメージは、アルビジョワ十字軍(1209～1219)と異端審問の開始(1231年以降)後、主として13世紀の正統教会の聖職者が創りだしたものであることがわかる。さらに言えば、「カタリ派異端」そのものが12世紀の後半に正統教会によって「創造された」ものであり(すなわち、そうしたものとして教会によってレッテルを貼られた結果であり)、教会の言説に他ならないのである。従来の研究は教会によって書かれた史料を実証主義的に、異端集団の教義・組織・活動に関する情報源として読み、無批判に教会言説である史料にアプローチしてきた。その結果、異端に関する教会言説の創りだしたイメージとその前提にある解釈枠組みを出発点にして異端現象を解釈するというトートロジーに陥っていたといえよう。したがって、「カタリ派異端」について(あるいは異端研究一般についても)、まず検討されるべきは「カタリ派異端」の名によって指示された集団や個人の本質ではなく、教会の「カタリ派異端」言説の形成とその具体的な歴史的コンテキストである。つまり、「カタリ派異端」はいかなる理由で、また、いかなる諸条件のもとで創造されたのか。

本研究は以上のようなカタリ派研究の方法論的な反省を深化させることから始まった。上記のようなテキスト認識論的な問題点以外にも、H. グルトマン以来の中世の宗教運動、異端研究が理念史・思想史の伝統的パラダイム(特定の影響力ある観念複合やイメージが時空を越えて伝達されるという系譜学的解釈)に立ち、異端問題が生成する「場」に対する視点を欠いていたことが明らかになった。そうした歴史的に規定された「場」において「カタリ派異端」に関する言説がいかに形成されたのか、反対に、このによって「定義」づけられた集団とはいかなる存在であり、かつ、教会の言説的介入によってそのアイデンティティをいかに形成していったか。以上のように、カタリ派の起源の問題は二元論的思想と教会の系譜的連鎖の追跡から、12～13世紀の西欧キリスト教社会の矛盾と葛藤が渦巻く社会・文化的な「場」における「正統」-「異端」の両項の相互的な規定のダイナミズムの分析へと、問題の枠組み自体を大きく変更する必要がある。

以上の研究の枠組みの見直しから、新たな研究方向として次の3点を明確にすることができた。まず第1に、「カタリ派」の名称の出現と普及を同時代史料の中に追跡し、その歴史的コンテキストを明らかにすること。この名称は近代における学問的な中世異端研究と歴史叙述においてラインラント・北フランス・南フランス(ラングドック)・北イタリア・カタロニア・ピレネー地域などに広がった運動の総称として用いられている。しかし、実際には、この名称はラインラントにおける運動の最初の局面(1140年代～1160年代)において出現した。注目すべきは、「カタリ派」の名称はその後は教皇庁の公式文書(教皇勅書・公会議教令等)では用いられるものの、使用例は比較的まれであるという事実である。ここから「カタリ派」のレッテルの出現は1140年代から1160年代のラインラントの宗教・社会状況というローカルなコンテキストにおいて理解すべきであるという認識が生まれる。一般化して言えば、これまで「カタリ派」としてあたかも一つの運動であるかのように括られてきたものは、12世紀から13世紀にかけて各地に現れた多かれ少なかれ二元論への傾斜をもつ地域ごとに多様な集団であり、その生成と意義はあくまでローカルなコンテキストにおいて理解される。その際に、上記のような史料の脱構築的な読みが求められてくる。

氏名	小田内 隆
----	-------

第 2 に、以上から、もはや「カタリ派異端」を統一的な教義（二元論の神学）と組織（対抗教会）をもった均質的な運動として描くことはできないであろう。しかし、他方で、運動の指導者である禁欲的なカリスマ（歴史学上の用語ではカタリ派の「完徳者」とされるもの）たちが相互にネットワークを形成し、二元論的な救済のメッセージを伝える宣教師として活動したこと、各地でそうしたカリスマのもとにローカルな「カタリ派信者」の共同体を創りだしたことは疑えない。その際、彼らはカトリック教会を墮落した悪魔の教会として、自らの集団を真の「キリストの教会」と意識していた。これをカトリック教会を模倣した「対抗教会」と理解する伝統的な「カタリ派教会」像は改めて再検討に付されなければならない。いいかえれば、彼らの間で「教会」とはいかなるものであったのかが、今後の研究課題として浮かび上がってきた。

第 3 に、教会が「カタリ派異端」の言説を紡ぎ出し、それに絡め取られた禁欲的なカリスマのもとにおける新たな宗教共同体の生成が起きた社会・文化的な「場」に関する仮説的な認識に至ったことである。二元論の問題はこの視点から再検討されなければならない。この点については、すでに昨年刊行した『異端者たちの中世ヨーロッパ』（NHK 出版、2010 年）において詳しく論じたが、今回の学外研究の過程で「身体のトポス（場）」における二元論の発展において、スコラ学の弁証法的な言説が一定の役割を果たしたことに着目できた。この論点も今後の課題である。

いずれにしても、「カタリ派異端」の場合について、「正統と異端」の二項対立の形成に新たな視点と展望を打ち出すことができ、上記の 3 点については一定の具体的成果を生み出すための準備作業を行えることができた。

氏名	小田内 隆
----	-------

3. 研究成果の公表：今回の研究成果公表の状況と予定を具体的に記入してください。			
既 発 表			
テーマ	発表形態	出版社/雑誌 巻号/学会名等	刊行/発表年月日
	<input type="checkbox"/> 著書 <input type="checkbox"/> 論文 <input type="checkbox"/> 学会発表		
	<input type="checkbox"/> 著書 <input type="checkbox"/> 論文 <input type="checkbox"/> 学会発表		
	<input type="checkbox"/> 著書 <input type="checkbox"/> 論文 <input type="checkbox"/> 学会発表		
	<input type="checkbox"/> 著書 <input type="checkbox"/> 論文 <input type="checkbox"/> 学会発表		
	<input type="checkbox"/> 著書 <input type="checkbox"/> 論文 <input type="checkbox"/> 学会発表		
執 筆 中 ・ 発 表 予 定			
テーマ	発表形態	出版社/雑誌 巻号/学会名等	刊行/発表予定年月
対異端論争から異端審問へ － 異端言説の転回点をめぐって－	<input type="checkbox"/> 著書 <input type="checkbox"/> 論文 <input type="checkbox"/> 学会発表	『立命館文学』において発表予定	2012 年前半期の予定
	<input type="checkbox"/> 著書 <input type="checkbox"/> 論文 <input type="checkbox"/> 学会発表		
	<input type="checkbox"/> 著書 <input type="checkbox"/> 論文 <input type="checkbox"/> 学会発表		
	<input type="checkbox"/> 著書 <input type="checkbox"/> 論文 <input type="checkbox"/> 学会発表		
	<input type="checkbox"/> 著書 <input type="checkbox"/> 論文 <input type="checkbox"/> 学会発表		
構 想 計 画 中			
<p>(1) カタリ派の起源に関する史学史的再検討。19 世紀半ばのシャルル＝シュミット以来、現在に至るまで支配的な解釈のパラダイムに対する方法論的批判をまとめる。</p> <p>(2) カタリ派の教会論を明らかにすること。「教会」／「セクト」というウェーバー＝トレルチ的な宗教社会学の概念を再検討し、その有効性と限界を明らかにする。</p> <p>(3) カタリ派の身体論を生み出す可能性の空間が中世カトリシズムの内部にあることを論証する。</p>			

氏名	小田内 隆
----	-------

提出期限：帰着後 2 ヶ月以内 提出先： 各リサーチオフィス ★ 本書式は、研究部ホームページにて公開します。
---

		RO 受付